

絵画の中 の はきもの

—仕事場の父を描く—

見一 眞理子

「好きなデザインを考えてみな。」と父が私に靴を作ってくれと言い出したのは私が会社勤めを始めた頃でした。そもそもの理由は店のディスプレイ用に紳士靴だけでなく婦人靴も並べたいという考えからだったようで、それならいっそ娘の靴をということでした。

理由はともあれ自分でデザインした靴を履ける、『紺屋の白袴』ということわざもあるように靴屋の娘と言っても履いたことがなかった注文靴を履けるのです。この時から私は作り手と注文側の両方の立場で職人としての父と接することになりました。

まずは寸法を測ることから始まり、木型の補正や仮縫いなど、完成するまでの様々な工程を初めて体験したのです。スケッチブックを持ち出し、ウィンドウに飾るということでちょっと目を引くデザインを自分なりに描いて、棚に積まれた革の中から気に入った色を見つけ出しては組み合わせってみました。私のラフスケッチからどんな製甲が出来上がってくるのかとワクワクしながら待ちました。ステッチ屋さんや製甲屋さんなど工程毎に専門の職人さんがいて、その手技の素晴らしさに改めて感動を覚えました。仕上がった靴はすぐには私のものにはならないので、毎日ウィンドウを眺めながら、特に淡い色合いの靴は陽に灼けなしかと心配しながら父の許しを待ったものでした。

その頃の父はちょっと日本人離れした顔立ちに加え、髭を伸ばし始めていました。そして歳を重ねるうちにとうとうピノッキオのゼペットじいさんのような風情になっていました。当時古い木造家屋の我が家は家ごとすっぽり蔦で覆われていて、私がトタンの雨戸にペンキで描いた西洋風な窓辺のせいかな近所ではパリの裏通りのようだと評判になりました。オレンジ色の灯りの下で仕事をする父の姿はまさにメルヘンそのもので、最初に父を描いた作品は創作絵本の主人公でした。

その後、二紀展に仕事場の父を描いた作品を出すようになりましたが、昔気質の父は作品についてあまり多くを語ってくれませんでした。私の作風もリアルな情景描写から心象的な画面構成へと変化していったことについても父本人の本当の気持ちを確かめないままになっていました。最近になって近所の方から、『お父さんはあなたの絵はがきを大事そうに持って、嬉しそうに話していたわよ。』とその時の父の様子を聞かされ、少しは親孝行が出来ていたのかなあと熱いものが込み上げてきました。今になって思うことは、父からもっとたくさん靴の話聞いておけば良かった、そして、父と一緒に一足でいいから靴作りを体験したかったと後悔しています。